

軍歌と漢詩（其一）

丹羽 博之

西暦二〇〇〇年三月十二日日曜日の昼下がり、三重県明和町の斎宮歴史博物館での出来事。見学を終えて帰ろうとした私の目に飛び込んできたのは、朱の色も鮮やかな旭日旗と錨のマークの入った雪を欺く白地の帽子。七十過ぎかと思えるが背筋をぴんと張った姿勢正しき三十数人の団体。茶髪に厚底の二人連れもちらほらする館内で、そこだけが時間が止まっているように見えた。入館申し込み書には、「海兵七十五期会」とあった。旧海軍兵学校の同窓会があつて、今でも集まって旧交を暖めているという話は、恩師一海知義先生のご著書『詩魔』（藤原書店）で知っていたが、直接お目にかかるのは初めてであった。後十年もすれば、あの会も寂しくなり、やがては「誰もいなくなる」と、帰りの車中で考えていた。

今回このような文を書くことを思いついたのも、軍歌をよく知っている世代が健在な間に書いておかなければ、後の時代にはわからなくなるだろうと考えたからである。美術や文学と違い、音楽は歌われる端から消えて行く。また其の時の雰囲気や歌った人の気持ちなどは記録しておかなければ、後世に正確には伝わらないであろう。私が少年時代を送った一九六〇年代は、戦争の余燼が未だ燻っていた時代であった。初詣に行けば、片足の無い白衣の傷痍軍人が頭を下げ、ひざまづいて寄付を募っていた。あつらは恩給（古い言葉であるが）をもらいながら、二重にお金をもらっていると、陰口をたたく知恵のある友達もいた。テレビでは「同期の桜」等の戦争番組がよく放映されていた。大学のコンパ会場の横には「歩兵第〇〇聯隊戦友会御一行様」等という札があり、軍歌が聞こえて来た。

歌の好きだった祖母から寝物語に「戦友」「水師營の会見」等を聞いて育った。「軍律厳しき中なれどこれが見捨てておかりようか」「赤い

軍歌と漢詩（其二）

夕日の満州に友の塚穴掘ろうとは」「庭に一本なつめの木」などの歌詞は戦争の悲惨さとともに幼な心に焼き付いた。ふとしたおりに聞く、軍歌の歌詞をよくよく見ると、漢詩の表現を利用している箇所が多くあることに気づいた。本稿では、軍歌の表現と漢詩について考察する。

一 波蘭懷古と越中懷古

波蘭懷古

落合直文作詞

一

ひと日ふた日は 晴れたれど

三日四日五日は 雨に風

道の悪しきに のる駒も

踏みわづらいぬ 野路山路

（二略）

三

ドイツの国も ゆきすぎて

ロシアの境に 入りにしが

寒さいよいよ まさり来て

降らぬ日もなし 雪あられ

四

さびしき里に いでたれば

ここはいづこと たずねしに

聞くも哀れや そのむかし
亡ぼされたる ポーランド

五

かしこに見ゆる 城の跡
ここに残れる 石の垣
照らす夕日に 色さえて
飛ぶも淋しき 鷗鴎の影

六

栄枯盛衰 世の習い
そのことわりは 知れども
かくまで荒るる ものとかは
誰かは知らぬ 夢にだも

『日本の唱歌（下）』（金田一春彦／安西愛子・講談社文庫）の解説によると、

明治二十六年二月、在独公使館付きの武官であった陸軍中佐福島安正は、任期が満了して日本に帰国するに際し、ただ一人、馬に乗り、ベルリンからワルシャワ、モスクワを経、ウラルを越えてシベリアに入り、さらに蒙古、北満州を経て、ウラジオストクまでやって来た。その間四カ月を費やしたという。当時はシベリア鉄道などまだなかったのである。

これは日本国内で大評判となり、その壮図が称えられたが（略）、国文学者落合直文は、これを題材として七五調一千余行の長詩を作ったが、そのうちの中佐がポーランドを通過するところが作曲されて、豆本の軍歌集などに載り、多くの人に歌われたのがこれである。歌詞に比して曲は大分見劣りするが、当時は歌いやすければ歓迎されたのである。

ポーランドがわざわざ取り上げられたのは、国土を分割された悲劇の歴史があるからであろう。ポーランド分割の歴史を簡単に見ておく。
ポーランド分割：Partitions of Poland 十八世紀後半に隣接のプロイセン、ロシア、オーストリアにより三次にわたって行われたポーランド国家の分割。（略）第一次世界大戦末期までの一世紀以上にわたり、ポーランドは分割列強の支配下に服した。『西洋史辞典』東京創元社】

ポーランド亡国の悲劇は、東海散士の『佳人之奇遇』において、かなりの分量をさいて紹介されている。

遂ニ魯普澳三国ノ為メニ分轄セラレ富強ノ雄邦黍禾空シク秀テ、燕子孤リ飛フヲ見ルニ到レリ（中略）木戸孝允モ亦從テ在リ之ヲ見テ深ク隆国ノ末路ヲ感シ憤歎措カス朝ニ歸リ廟堂諸老ヲ戒メタリト云フ是レ皆波蘭人自ラ取ルノ過チナリト雖モ三国ノ暴戾無道ナル豈文明ヲ以テ自ラ許シ深ク西教ヲ信スル者ノ為ス所ナランヤ

かくして、明治時代の人々はポーランドに対して、欧州の強国に分割された亡国のイメージを持つようになった。さらに庶民にまで浸透したのは、軍隊で「波蘭懷古」が歌われたからである（八木光昭氏「ポーランド文学が日本近代文学に与えた影響」阪東宏編『ポーランド入門』三省堂）。波蘭は波瀾（万丈）の意味も連想させる表記である。森鷗外も次の様に歌う。

勇あり智なき すゑえでん

武運つたなき ぽおらんど

「第二軍」（『うた日記』）

鷗外は、他にもポーランドを題材とした「十人」「子もり歌」を創作している。これらの作には「武力の下に亡国の憂き目を見ている特別な思い入れが反映している」（前掲書）という。

その五番の歌詞に「飛ぶも寂しや鷗鳩の影」とあるが、鷗鳩という鳥は、菅原浩／柿澤亮三『図説日本鳥名由来辞典』（柏書房）によると、

清の余曾三の「百（花）鳥図」他五譜の鷗鳩の図はコモンシャコである。コモンシャコは、キジ科のキジバト大の鳥。背、胸は黒色で白点が散在する。中国南部に生息し、李白の詩「只今惟有鷗鳩（ママ）」に詠まれている。中国産の鳥であるが、平安時代から鷗鳩の名

は知られ、江戸時代には飼鳥として輸入されていた。

とあり、ポーランドにはいないはずである。では、なぜ「波蘭懷古」に詠まれているかといえ、『図説日本鳥名由来辞典』も挙げる李白の有名な「越中懷古」に登場するからである。

越中懷古

越王句踐破吳歸 越王句踐 吳を破つて帰る

義士還家盡錦衣 義士家に還つて 盡く錦衣

宮女如花滿春殿 宮女花の如く 春殿に満つ

只今惟有鷓鴣飛 只今 惟だ鷓鴣の飛ぶ有り

『唐詩選』にも収められており、江戸時代から現代に至るまで日本人の人口に膾炙して来た有名な詩である。この李白の詩によって鷓鴣は亡国荒廃の象徴とイメージされるようになった。

白楽天も「長洲苑 1203」において、

春入長洲艸又生 春は長洲に入りて 艸又生じ

鷓鴣飛起少人行 鷓鴣飛び起ちて 人の行くこと少なし

年深不弁娃宮處 年深くして 娃宮の処を弁ぜず

夜深蘇臺空月明 夜夜蘇台 月明空し

と鷓鴣を詠んでいる。

ドイツからシベリアを経ての長い道中で「波蘭」が題名になっているのにはそれなりの意味があった。中佐の快挙を讃えるとともに、ポーランドの二の舞にならないように、「殷鑑遠からず」の戒めの意味もあって「波蘭懷古」が歌われたのであろう。福沢諭吉の『西洋事情』にも「ポーランドの轍を踏んで国を亡ぼすこと必せり」とある。

伝統的な漢詩の古跡懷旧のテーマのに即して欧州の遺跡が詠まれている。そうした折りに、作詞者落合直文の脳裏にあったのは李白の「越

中懐古」であり、そこに登場する鷓鴣であった。直文は、『佳人之奇遇』に「黍禾空シク秀テ、燕子孤リ飛ヲ見ル」とあったことにも影響されて、鷓鴣飛ぶとしたのであろう。それ故に一千行の長編の詩の中で、波蘭だけが選ばれて軍歌として作詞された。落合直文は、井上巽の孝女白菊の漢詩を七五調の「孝女白菊の歌」にしているが、それと良く似たことを「波蘭懐古」でも行っている。

第一次大戦では、ドイツ・オーストリア・ロシアに配属されたポーランドの兵が戦場で同じ民族同士相討つ状況におかれたというから、その悲劇やいかばかりであったことか。波蘭は、第一次世界大戦後にやっと独立したのもつかの間、一九三八年のナチスドイツの侵攻によって再び国土は占領された。ワルシャワ蜂起と降伏後のナチスによるポ文化の意図的徹底的な破壊。更には、第二次世界大戦後の冷戦時代のソビエトの支配と苦難の連続であった。

次に挙げるのは、『歴史への招待28巻 日露戦争』（NHK）に収める日本の捕虜収容所の様子である。

しかし、ロシア軍は日本軍と違って民族が種々である。兵卒同士での反目がひどい。収容所はロシアの縮図でもあった。ロシア人とポーランド人、ユダヤ人はそりが合わない。

そりが合わないのは当たり前である。ポーランド人等非征服民族にとっては、ロシア人は不倶戴天の敵である。その強大な帝政ロシアと戦っている極東の小国日本は、先祖の敵を討ってくれ、ポーランドの独立をも支援してくれるかも知れない友好国と映ったであろう。ポーランド独立運動の幹部が日露戦争中来日し、対露秘密協定を結ぼうとした。また、ポーランド人は進んでロシア国内でも反乱を起こしたという（前掲『ポーランド入門』）。兵同士の反目がひどい、というのは裏返せば、将校の多くは、ロシア人の貴族階級という共通の同族意識があつて結束が堅かったということであろう。

奉天の会戦等で数の上では優勢を誇った露軍が劣勢の日本陸軍にもろくも破れた一因は、こうした被征服民族兵が多かったからであろう。露軍の中でこうした非征服民族の兵が何割いたかは知らないが、彼らは最初から戦意など無いし、日本兵が近づくまでは身を守るために銃を撃つであろうが、一度堡壘に躍り込まれると、逃げるか、降参するのが命を全うする最も賢明な選択であろう。

また、非征服民族の兵は露語が解らぬ者が多かったであろう。もともとやる気の無い兵に、命令の伝達もままならず、意志の疎通も欠けた。中には命令がわかっていても露語がわからないふりもできたであろう。更に、露軍兵士に対する反発や非征服民族同士の反目もあった

だろう。「敵は幾万ありとても すべて烏合の勢」であった。こうした裏の事情もあって、劣勢の日本陸軍は辛勝したように思う。日本軍は勝因を天佑神助、大和魂の勝利と分析したであろうし、露軍は負け戦の分析には熱心ではなかったのではないか。

日本海海戦にしても、海路一万五千余哩を万苦を忍び、へとへとになってやって来た老朽艦まじりのバルチック艦隊を待ち構えての東郷艦隊の大勝利であった。ろくに訓練もできず、長途の航海の果て、人も疲弊し、病人も多く出たであろう。北国生まれのロシア兵が灼熱の赤道を何度も越えるのも辛いことであった。狭く暑苦しい男ばかりの艦内での長期間の生活は、それだけで戦意喪失するのではないか。軍艦も砲がさびたり、火薬の劣化、艦底に貝殻がついたり、整備不良等悪条件が重なっていた。しかも初陣のバルチック艦隊に対して、数度の実戦経験もあり、練習も休養もたつぷりの聯合艦隊が迎え討ったのであるから、戦う前から勝敗は決まっていた。バルチック艦隊にも、非征服民族の兵がいたとしたら、彼らは誠に気の毒と言うほかは無い。彼らを含め露の水兵は、苦しい苦しい航海のあと、ウラジオストックを目前にして海の藻屑と消えたのであるから。陸戦の場合は、脱走や白旗をあげることもできようが、海の上では運を天に任すほかは無い。

一九九八年、大阪市の阿倍野市民学習センターの「漢詩に親しむ」の講座で、李白の詩と「波蘭懷古」を紹介したところ、ある男性が立ち上がって、昔軍隊で歌いましたと発言された。その時は、ピンとこなかったが、今回ポーランドの悲しい歴史を知って、その事情がよく解った。神保一郎『クラシック音楽鑑賞事典』（講談社学術文庫）のショパンの項には、

その夢幻的な詩人ショパンも、一方では故国ポーランドの上に思いを馳せるとき、烈々たる憂国の至情で鍵盤を血潮に染める情熱の詩人でもあった。

とある。大学院の学生の頃、誰もいない夜の院生研究室で、ショパンのピアノ協奏曲第一番をよく聞きながら、勉強にいそしんだ。ピアノ協奏曲第一番を含め、ショパンの曲には、その奥に何かしら暗いものを感じていた。今回、波蘭分轄の歴史を知って、その理由も解るような気がした。彼のエチュード「革命」は十一月蜂起が契機になって、やむにやまれぬ激情から作曲されたことも、今回初めて知った。

二 四海兄弟

日本海軍

大和田建樹作詞

四面海もて 囲まれし

小山作之助作曲

我が敷島の 秋津州

外なる敵を 防ぐには

陸に砲台 海に船

艦船勤務

大和田建樹・佐佐木信綱作詞

瀬戸口藤吉作曲

四面海なる帝国を

守る海軍軍人は

戦時平時の別ちなく 勇み励みて勉むべし

など、海国日本の四方を守ることが強調される軍歌がある。四方を海と捉える世界観は、已に中国の古典に例がある。

四海之内、皆兄弟也 四海之内、皆兄弟なり『論語』（顔淵）

且夫天子以四海為家 且つ夫れ天子は四海を以て家と為す『史記』（高祖本紀）

これらの世界観は日本の漢詩にも詠まれる。

三階平煥 四海殷昌『懷風藻』(序)

曉猿莫作斷腸叫 曉猿作すこと莫かれ 断腸の叫を

四海爲家帝者心 四海を家と爲すは 帝者の心

小野岑守「奉和江亭曉興詩、応製」『凌雲集』

等、四海の世界観は上代から日本にも伝わった。

作詞者大和田建樹(一八五七―一九一〇)の作品には、漢詩を下敷きにした例が多い。^{注1}幕末に愛媛県宇和島の藩校明倫館で少年期を送った大和田にとっては、漢詩文は血肉となっていた。彼の脳裏の国とは、中国の世界観に基づく「四海之内」であった。大和田は「日露軍歌」(明治三六年)においても、次の様に歌う。

こだまにかえす 勝ちどきの

声は四海に みちみちて

ウラルの山の 峰までも

北氷洋の 底までも

明治天皇の

四方の海皆はらからと思ふ世になど波風の立ち騒ぐらむ

の歌も、先の『論語』を利用したものであることは明白であろう。明治帝の学問は当然『論語』にも及んでいた。知識人の多くはこの歌を聞いて『論語』を思い浮かべたであろう。しかし、この歌が学校等で教えられる時には、『論語』の精神を利用したものとは説明されたのであろうか。

「日本海軍」の曲は、金日成によって、「反日戦歌」という抗日の歌として歌われていたという(安田寛『日韓唱歌の源流』音楽之友社)。日本海軍を讃える軍歌を逆手にとって、反日の歌に替えている。正に毒を以て毒を制す、である。この曲は、日本でも多くの歌詞をあてはめて歌われた(前掲『日本の唱歌』)。

軍歌と漢詩（其二）

最近、完成した串本大橋のたもとは、「四海兄弟 和歌山県知事西口勇」の碑が、「串本節」の碑と並んで建てられた。四海兄弟の理想は今も生き続けている。

三 巡航節と山男の歌と常磐炭坑節

巡航節 作詞作曲者不明

雪を欺く 白地の事業服

胸のマークはヨー 一の文字ヨー

帽子目深に 月の眉かくして

笑みを含んでヨー チルラーとるヨー

娘さんよく聞け 生徒さんに惚れるな

沖でドンと鳴りゃヨー 若後家ヨー

腰の短剣 伊達にはつらぬヨー

魔よけ虫よけヨー 女よけヨー^{注2}

娘さんよく聞け 生徒さんの好物はヨー

シャバの便りとヨー 酒保ヨーカンヨー

『思い出の軍歌集』（野ばら社一九六四年）

「雪を欺く」は漢詩による比喩的表現の分類といえよう。小島憲之氏は

丘為「梨花」

「冷豔全欺雪、餘香乍入衣」（冷豔全く雪と欺き、余香乍ち衣に入る）

紀御依「奉和聖製江上落花詞」

「見落花 落花欺雪滿湖裏」（落花を見る 落花雪と欺き湖裏に満つ）

（『群書類従』巻一三四「雜言奉和」）

等を挙げられる（『上代日本文学と中国文学』塙書房）。「雪を欺く」は後には、和文を中心に、「中肉にして色艶く、雪をあざむく肌には」（洒落本・『淫女皮肉論』・品川の花ふぶき）等、女性の肌の白さ等について使われる事が多い。

月（三日月）から眉を連想する例も古典に例がある。小島氏は（前掲書）、『万葉集』の伴家持の

ふりさけて若月みれば一目見しひとの眉引おもほゆるかも（九九四）

の歌や坂上郎女の「つきたちてただ三日月の眉根かき」の歌（九九三）は漢語「蛾眉」や梁何遜「望初月詩」「今夕千餘里、雙蛾映水生」を裏に含む、と述べられる。「雪を欺く」「月の眉」どちらも女性の形容によく使われる表現である。女人禁制の兵学校にも、軟文学に長けた生徒もいたのだろうか。

『歌をたずねて』（毎日新聞学芸部・音楽之友社）によると、この巡航節のルーツは、岡山県笠岡市の南の海上の北木島という花崗岩の産地を中心に歌われていた『石屋節』という「石切歌」にあるという（ビクターファミリークラブ『抒情歌愛唱歌大全集』も同様の解説を付す）。

やれ 嫁に行くまい 石屋の嫁に 石がドンとくりや 後家になる「石切歌」

『巡航節』は『山男の唄』ののどかさとは違い、もっとリズム感を入れた曲で、このリズムの間にカッターを入れたという、とある。ところが、海軍兵学校出身者の歌った『軍歌大全集』（キングレコード・一九九五年）で聞くと『山男の唄』とそっくりである。軍歌・戦時歌謡大全集「海ゆかば」別冊解説書（日本コロムビア株式会社）には「メロディは殆ど同じです」「恐らく海で鍛えた海軍士官が復員して山男の群れに入って唄い出したものと思います」とある。旧海軍兵学校前の旅館「江の島荘」で見せてもらった雑誌の兵学校の名簿には、「山男の歌」の作詞者神保信雄の名前は無かった。神保信雄氏に関して、ご存知であれば教えていただきたい。

この度、ふとした偶然から気づいた「常磐炭鉱節」の歌詞の方が、「巡航節」の歌詞に近い。

娘ようきけ 鉱夫の嬢は 岩がどんとくりや 若後家よ「常磐炭鉱節」

娘さんよく聞け 生徒さんに惚れるな

沖でドンと鳴りやヨー 若後家ヨー「巡航節」

やれ 嫁に行くまい 石屋の嫁に 石がドンとくりや 後家になる「石屋節」

「娘ようきけ」「若後家よ」の歌詞が共通する。

『山男の唄』は「三十六年（引用者注：昭和）ごろだったか、北関東のどこかで公演した時、見知らぬ人がこういう歌があるがどうかと、話を持ってきた」（『歌をたずねて』毎日新聞学芸部・音楽之友社）とあるが、「常磐炭鉱節」が歌われたのも主に北関東地方である。「常磐炭鉱節」を知る兵学校生徒が「巡航節」の歌詞を思いつき、巡航の時に歌い継がれ、戦後の平和な日本で『山男の唄』となったのであろう。

この歌は山から海に伝わり、また山に戻った。その本質は労働歌であろう。炭鉱の仕事もカッターを漕ぐのも、山に登るのも苦しい。巡航節、山男の唄には苦しいながらもユーモア、余裕が感じられる。炭鉱では苦しい仕事を一生続け、その石炭や貧しい女工の紡いだ生糸が軍艦を造り、その軍艦に乗った人々の多くは太平洋の藻屑となった。巡航の練習の後に待っていたのは、地獄の戦場であった。山登りの後には、日没、日の出等壮大な自然のドラマ、山小屋での酒、唄など至福の時が待っている。炭鉱、兵学校で歌われた歌は、平和な山でついの住処を見つけた。「常磐炭鉱節」「巡航節」が歌い継がれることは無いだろう。

歌詞については、その変遷が辿れたように思うが、メロディーは、どうなのであろうか。「巡航節」と「山男の歌」が同じなのは、一聞瞭然だが、「巡航節」と「常磐炭鉱節」を聞き比べて見たが、どうも共通性は無いように聞こえる。作曲者不詳の「巡航節」のメロディーのルーツはどこにあるのだろうか。

旧制高等学校の寮歌が軍歌に替え歌になっているものも多いが、海軍軍歌は戦後、山の歌に替えて歌われた例が多い。

①『雷撃隊出撃の歌』（母艦よさらば 撃滅の翼に映ゆる 茜雲）↓『穂高よさらば』（芳野満彦作詞・穂高よさらば 又来る日まで奥穂に映ゆる 茜雲）

②『海軍小唄』（汽車の窓から手を握り 送ってくれた人よりも）↓『谷川小唄』（作詞者不詳・夜の上野の プラットホーム 可愛いあの娘が 涙でとめる）

③『可愛いスーちゃん』（お国の為とは言いながら 人の嫌がる軍隊に）↓『新人哀歌』（作詞者不詳・いいぞいいぞと おだてられ死に物狂いで 来てみれば）

④『ダンチヨネ節』（沖の鷗と飛行機乗りは どこで散るやらネ はてるやらダンチヨネ）↓『剣の歌』（作詞者不詳・夢に描いた 剣の山にヨー 意気と力でネ ぶちあたるヨカネー）

*山の歌は『決定版山の歌ー山の四季ー』（キングレコード・一九八九年）による。

海軍軍歌と山登りには、共通する要素があるようだ。海と山の違いはあるが、苦しい中にも共に海山等の自然と接した人間の心情が生み出したもののように思う。勇ましい行進曲風のものではなく、②③④のような、やるせない哀愁を帯びた曲が替え歌になっている。その方

軍歌と漢詩（其二）

がゆったりとした（しかし苦しい）山登りのリズムに合うのであろう。

このほか、「巡航節」の歌詞につき、気づいたことを記す。

娘さんよく聞け 生徒さんの好物はヨー

シャバの便りとヨー 酒保ヨーカンヨー「巡航節」

娘さん よく聞けよ 山男の好物はよ

山の便りとよ 飯盒のめしだよ「山男の歌」

帝国海軍の虎の子と言われた兵学校の生徒さんも一皮むけば、娑婆からの便りと食いものが好物という。なんともほえましい歌詞である。それは、山男とて同じこと。こうした歌詞が替え歌となって歌い継がれている。「軍歌・戦時歌謡大全集 海ゆかば」（日本コロムビア）の「巡航節」では次の歌詞も載せる。

沖のかもめに 潮どき問えばヨー

わたしやたつ鳥ヨー 波に聞けヨー

ソーラン節と全く同じ歌詞である。舟歌、労働歌としての共通性はあるが、何故、巡航節に紛れ込んだのか不明である。

明治期の軍歌の歌詞には漢詩を下敷きにしたものが多い。今回取り上げたものは、氷山の一角である。まずは、個々の具体的な事例を検討し、つぎに軍歌と漢詩の内容的な比較を行う予定である。筆者は、一千年前の平安文学や一千二百年前の白楽天を主な研究対象とした来た。当然その時代のことは、今となってよくわからぬことが多い。今回取り扱った明治時代の軍歌等にも、僅か百年前のことだが解らぬことが多い。ご教示をお願いしたい。

注

大和田建樹（一八五七―一九一〇）の代表的な唱歌「旅泊」、「哀れの少女」も、漢詩の表現を借りている。「旅泊」の二番の歌詞の「月影落ちて鳥鳴き」は唐張継「楓橋夜泊」の「月落烏啼霜滿天」をそのまま利用している（二〇〇〇年五月十日、浙江大学の「中国古典文学・書法学术交流中日連合検討会」に於いて、『唐張継の「楓橋夜泊」と大和田建樹の「旅泊」という題で口頭発表』）。「哀れの少女」の一番の歌詞の「吹き巻く風は顔を裂き」は、唐岑参「走馬川行奉送封大夫出師西征」の詩の「半夜軍行戈相撥、風頭如刀面如割」（半夜軍行戈相撥し、風頭は刀の如く面は割かるる如し）等、漢詩に見える「寒さによって面も割かれる」を利用したものであろう。和文には、こうした例は無いように思う。また、大和田の「水雷艇の夜襲」の「指は氷にちぎるとも」は、李華「弔古戰場」（『古文真宝後集』）の「積雪没脛、堅冰在鬚、（略）墮指裂膚」から影響を受けたものであろう。「裂膚」は「顔を裂く」と似た表現である（二〇〇〇年十月十五日、国学院大学での「東アジア比較文化国際会議日本大会」において『明治唱歌「哀れの少女」に見える和洋中折衷の文化』という題で口頭発表）。彼の代表作「鉄道唱歌」の冒頭の「汽笛一声新橋を」も唐の趙嘏の「長安晚秋」の「殘星幾點雁橫塞、長笛一聲人倚樓」（殘星幾點 雁塞に横たはり、長笛一声 人樓に倚る）を利用したものであろう。杜牧は此の句を愛して「趙倚樓」と呼ばれたという。

大和田には海軍軍歌に名作が多い。彼の生まれ故郷は、愛媛県宇和島である。少年時代海に面した宇和島の藩校明倫館で漢学を学び、更に広島外国語学校で学ぶ際、海を渡った経験等が海軍軍歌創作の背景にあったのではないか。「磯の火細りて 更くる夜半に」で始まる「旅泊」も彼の船旅の経験が活かされていると思う。「旅泊」は一九四七年の『五年生の音楽』では、同じメロディーで「灯台守」として載る。「旅泊」のイメージを残しながら、分かりやすい口語になっている。韓国でも同じメロディー、ほぼ同じ歌詞で「灯台守」（등대수）として、今でも歌われているという。この九月五日に大和田建樹の生まれ故郷、宇和島を訪れた。竜華山等覺寺に移築された生家に行ったが、見るも無残に荒れはてていた。最近の学生に聞いても、「鉄道唱歌」（発表されてから百年にあたる）すら知らないと言うからやむをえないのかもしれない。しかし、大阪から高い交通費を払い、大和田にそれなりの思い入れを持って行っただけに、甚だ残念であった。後日、朝日新聞一九九九年九月十七日朝刊の記事に、

「大和田建樹記念館」の看板があった。だが、中はほこりだらけ。傾いたSL写真パネルが掛けてある。無残な荒れ家だった。移築した際の顕彰会は自然消滅し、管理されないうまま、荒れ果ててしまったという。市教委は「公園のような所へもう一度移築して、ちゃんと保存しよう」と計画中だが、行政だけでは難しい」と説明する。望郷の詩人に対し、今の地元はひどく冷淡に見えた。

とあるのを知った。全く同感である。スコットランドの国民詩人ロバート・バーンス（'Auld Lang Syne」の作詞者。日本では蛍の光で有名。軍歌では「訣別」・「別れ」（大和田建樹作詞・今日は手を取り語れども）として歌われた）の生家はちゃんと保存されている。ザルツブルクのモーツアルトの住家（十代後半から二十代前半に住んだ）も戦災で変わり果てたが、数年前、元の姿に再建されたのを見るにつけても、日本の文化財保存の貧しさを痛感する。そういえば、昨年訪れた大分県竹田の広瀬神社も寂れていたし、福井県にある第六潜水艇の佐久間勉大尉の生家付近にある遺品館も閉まったままで、人影はなかった。二〇一〇年は、大和田建樹没百年あたる。それまでに何とかしたいと思う。

「艦船勤務」（大正三「一九一四」年に出版された『海軍軍歌』に所収）は、大和田・佐佐木の合作になっているが、これは大和田没後に佐佐木が筆を加えたのであろう。大和田の遺稿の時点で既に冒頭の「四面海なる」の歌詞は出来上がっていたと思う。「四面海」は、大和田の十八番だと思

軍歌と漢詩（其二）

うからである。

軍歌に限らず、明治の唱歌には、江戸漢学の伝統を受け継いだ作詞者によって、漢詩を下敷きにしたものが多い。大正、昭和になると作詞者の世代交代もあって、漢詩の影が薄れていく。

2
「兵学校数え歌」には「五つとせ 粋な短剣伊達じやない 魔よけ虫よけ女よせ」とあり、この方が面白い。軍歌・戦時歌謡大全集「海ゆかば」別冊解説書 日本コロムビア株式会社には「女よけヨ」の歌詞があるが、鏡五郎とコロムビア合唱団は、そのCDでは「女よせ」と歌っている。上級生から下級生へ、口から口へ伝えられて行くうちに、硬派の生徒は「女よけヨ」と歌い、そうではない生徒は「女よせヨ」と歌ったのであろう。「万葉集」等に「一に云ふ」と、古代歌謡にも異伝が多くあった。「巡航節」も口から口へ伝わるうちに、さまざまに変化したのであろう。「別冊一億人の昭和史 日本海軍史」（毎日新聞社・七九年）所収の「巡航節」は十五番まであった。

参考資料

ポーランド懐古

（明治26年頃）

落合直文 作詞
作曲者不詳



巡航節

作詞曲者不詳

作詞曲者不詳



（『思い出の軍歌集』野ばら社 1964年）

山男の歌

神保信雄 作詞
作曲者不明



（『日本のうた』野ばら社 2000年）

後書き

二〇〇〇年八月九日、「巡航節」の資料を求めて、江田島の旧海軍兵学校を初めて訪れた。午前にも一回、午後から二回、無料で見学ができるが、午前だけで七十人ぐらいの見学者があつて、その数の多さに驚いた。多いときには百人をこえるという。若い世代は、広島県の原爆記念館を見ての帰りに、戦争の悲惨さ（特攻隊の遺書も展示）を見学するため立ち寄るようだ。年配の方には、昔日の帝国海軍への郷愁があつて、若き日を思い出すすがに訪問しているようだった。定刻五分前に入つて来た案内係の誘導に従つて、校内各所の説明を聞いた後で、教育参考館に入つた。ここだけは、今でも全員脱帽、写真撮影禁止の場所である。参考館の長い階段を登つて展示室に入ると、勝海舟の遺品があり、彼の漢詩と思われるものが掛けてあつた。押韻はされているが、平仄は合っていない。その横の解説に「寒風捲^レ微雪 怒濤頻鼓^レ舷 雲散海空濶 鵬翔北冥天」と返り点が付けてあつたが、「寒風捲^レ微雪」では意味が通じない。「寒風捲微雪」（寒風微雪を捲き）と訓むべきである。海軍生みの親、初代の海軍卿は泉下で何と思つてゐるだろうか。勝は日清戦争時、威海衛に於いて北洋艦隊降伏の責任をとり、従容として毒を仰ぎ自決した丁汝昌を悼んだ詩を作つてゐる。勝は、「こういう詩を作つた。しかし、平仄などは、むちゃだよ。」（『氷川清話』）と話している。

太平洋戦争中の将官の遺墨もあつた。山本五十六聯合艦隊司令長官がミッドウェー海戦で戦死した空母「蒼龍」だったか「飛龍」の艦長を詠んだ短歌もその中にあつた。所謂、変体仮名でしたためられていたが、その解説（翻字）たるや、まことにひどいものであつた。およそ次の様に翻字されていた。

海の子の雄々しくふみて来み之道君たちつくしつ神上りまし怒

「来み之道」では意味が通らない。変体仮名の「尔」を、何故か「み」に読み誤つてゐる。ここは「来にし道」と完了の助動詞の連用形で読む（「来にし道」というのも耳慣れない表現ではあるが）。中途半端に「之」「怒」と翻字するから、見る者はびっくりする。これでは炎に包まれながら沈み行く艦と運命をともした艦長も浮かばれまい。山本長官もあの世で怒つてゐるであらう。この歌は

海の子の雄々しくふみて来にし道君たちつくしつ神上りましぬ

と読む。「来にし道」に違和感を覚えるが、意味は明瞭である。歌としての出来はいかがであろう。よりによって、勝海舟、山本五十六という海軍を代表する人の遺墨の解説に初歩的な間違いがあった。たまりかねて、名刺の裏に訂正したものを案内の人（非常に熱心に旧兵学校を解説してくれた）に渡して説明したが、その後訂正されたであろうか。数年前、京都国立博物館の常設展示室で「詩聖李白」とあって驚いたが、こうした誤りは困りものである。参考館での見学は僅かに五十分で、どうしても若い特攻隊員の遺書などに、目を奪われる。じっくり掛け軸まで読む人は稀であろう。それにしても、今まで誰も誤りに気づかなかったのであろうか。

帝国海軍の光輝ある歴史を今に残し、江田島精神の真髄を伝える「教育参考館」というからには、こうした基本的間違いがあつてはいけない。かつての兵学校生徒は、下着も靴下もまっさらのものに換えて入館したという。今でも、ここで学ぶ幹部候補生たちは、制服に威儀を正して見学すると案内の人から聞いた。そのようなかつての海軍の聖地であると聞いただけに、戸惑いを覚えた。

また、第六潜水艇で殉職した佐久間勉艇長の遺書の写真と夏目漱石の文章もあった。その解説には、漱石の「文芸とヒロイック」とあつたと記憶する。興味を覚えて、帰宅して『漱石全集』を繙いてみると「文芸とヒロイック」ではなく、「艇長の遺書と中佐の詩」という文章だった。僅か、五十分の見学でこれだけの誤りがあるということは、じっくり見たならばもっと多く出てくるのではないか。

この参考館には当然ながら、士官を中心とした人々の遺品が残されている。下士官兵と称された人々の遺品は何処かに保管、展示されているのであろうか。戦前は海軍士官の優雅な生活を支えし、縁の下の力持ちに甘んじた人々の歴史は、記録され、保存されているのであろうか。人数的にはこちらの方が遥かに多いのに。死人に口無しというが、一将功成らず、枯れていった万骨の怨念や如何に。

翌日、古鷹山に登った。欧州や日本の三千米級の山にも登った経験から、三七七米（戦前は三九二米）の古鷹山を軽く見ていた。しかし、快晴の真夏の午後一時の登山ということもあって、思ったよりもきつい山登りであった（古鷹山の頂上が二つあるとは知らなかった）。頂上近くの花崗岩の岩肌は、かつての多くの登山者によって擦り減っていた。最近では登る人も少ないと見えて、登山道は夏草に占められていた。頂上からの三六〇度の眺めは実に素晴らしく、兵学校も眼下に望めた。かつては、ここからは聯合艦隊の艦艏の勇姿も望みできたのである。松蔭の下、麓からの涼風に吹かれ、遅い昼飯とビールを賞味しながら、ここに登った多くの人々に思いを巡らした。「夏草や兵どもが夢の跡」が自然と口をついた。

ふと見た枝には「むすめさんよくきけよ 最近の山男にや良い男が多い」という札がかけてあつた。時移り、人代わりて、古鷹山も太古の平和な山に戻っていた。